

北洋方面に於ては、八月八日夜半、威海・旅津附近は敵の艦隊を被り、地上の「ソ」軍は、全九日未明水流湍方面から豆清江艦隊橋梁を突破して北洋に渡ると共に、又、海上方面に於ては、十日、威海及旅新に上陸し來つた。

豆清江下流方面に在つた混成才百一連隊は、九日夜、才三軍命令によつて会寧附近に後退し、又、旅新要塞守備隊は、一部を以て敵を拒止しつづ、十八日、古茂山に後退した際、停戦命令を受領した。

清津方面に於ては、十三日正午頃に至り、約一大隊の「ソ」軍が清津港に上陸して來たので、旅南師管区旅南地区司令官 佗美 清少将の指揮する佗美支隊（約二大隊）及 旅城西南地区の旅南師管区才一歩兵補充隊は、直ちに攻勢に出で、敵才一線を突破したが、清津市街に突入敵の爲爾後の戦闘は進展しなかつた。

然る處、十四日夜、更に約一ヶ師團の敵は、清津に上陸し來つたので、

0092

師管区司令官は、攻撃部隊を旧陣地に復帰させたが、一方、慶典方面から南下した福甲約一ヶ旅団の敵は、十五日、羅南北方地区に進出し、前述清津上陸の敵と共に、続いて南下の勢を示したので、羅南師管区部隊は旧陣地に集つて之を拒止した。

師管区司令官は、十八日朝西方の山地を迂回して賓州（羅南南方約九十軒）に撤退するに決し、逐次戦進行態に移つたが、夕刻京城から派遣された参謀から停戦命令を受けた。

尚、咸興平地に在つた才三十四軍は、才五十九、才百三十七兩師団を以て定平（咸興西南方約二〇軒）西方高地帯を占領し南下し来る敵に備えたが、敵と交戦するに至らずして終戦に至つた。

而て、定平に在つた才百三十七師団長秋山義中將は十日師団機關司令部に於て従軍として自決し、又、独立歩兵才百九大隊長坪井大佐も二十四日秋山を自決の遺を遺んだ。

才三十四軍司令部は、八月十五日大團を押し、且つ、続いて、積極作戦の中止の調度軍命令に懸したので、此の調、各兵團部隊に懸し、

蘇、蘇南鐵道線北の交戦中の部隊には、容易に依わらなかつた。<sup>二二</sup>  
次で、軍司令官は、延吉に至り、「ソ」軍と停戦協定を為すべき開原  
軍命令を受けたので、八月二十一日高級参謀 廣 大佐以下將校人  
員を帯同して、望峰延吉に至り、「ソ」軍才二十五軍参謀長シヤーニン  
少将と会見し、停戦後の問題に関し、互に折衝を重ねた。  
本交渉に於て、特に問題となつたのは、北鮮の日本軍は、全部之を吉  
茂山に集結せしめんとする彼側の要求であつた。  
然し、鉄道は破壊せられ、且つ、物資の甚だ貧弱なる吉茂山に在る北鮮  
の全軍將兵を集結すれば、特に、寒冷期を目前に迎えた當時としては、  
正に死を迎える行為に等しかつたので、我方は極力之に反対し、蘇南  
師管区部隊の大部は蘇南附近に、才三十四軍及成興附近の師管区部隊  
は成興及元山附近に、平安南北道の部隊は平壤附近に夫々、集結する  
より意見を述べ、之を承認せしめた。  
以上の如く取決めたにも拘らず、其後、日本軍の集結に関し、「ソ」  
軍は、一再ならず、一地集結と語り死傷の自衛を主張要求する態度に

0094

出る事があつたが、我方は、その都度、勞を厭わず、折衝を累ねて、  
分割収奪を認めるすことに勉めたのであつた。

又、此の方面の「ソ」軍は、日本軍が戦闘行動を停止した後に於ても、  
軍事行動を以て南進を続け、二十八日、一部を以て三十八度線を突破  
し、關城・春川に進入した。

仍つて我方は、その事實を、中央進路より連合國最高司令部に訴える  
と共に、現地に於ても、直接「ソ」軍にその旨申入れ、漸く之を北緯  
三十八度線以北に撤退させることに成功した。

0095